

# 歴史と民俗33

神奈川大学日本常民文化研究所論集 33

2017年2月22日発行  
神奈川大学日本常民文化研究所編  
発行所 株式会社平凡社

[要旨集]

---

## ■特集 「漁場図」を読む

p 13

### 近世の「漁場絵図」から近代の「漁場図」へ

—島根県出雲国中海の「赤貝活かし」場利用を事例に

伊藤康宏

#### 【要旨】

近世日本において水産業・漁村は全国各地で社会的分業を担う形で展開した。その過程で漁場紛争が漁村と漁村の間であるいは漁村内で頻繁に起こり、それを解決するための証拠書類として「漁場裁許絵図」等が作成され、関係者・機関に保管されてきた。また、近代以降は多種多様な漁場図が作成されるが、一般的には沿岸漁業の振興と漁業調整のために作成された沿岸漁業の漁場図が行政資料のなかに少なからず残されている。本稿は松江藩・島根県の出雲国中海の「赤貝活かし（養殖）場」利用の事例を通して近世・近代の漁業権・漁場図を歴史的に位置づけ、その特徴と意味を明らかにすることを課題とする。論文構成は、はじめに、一 研究史の整理と研究課題、二 松江藩時代の出雲国中海「赤貝活かし場」争論と関連資料、三 島根県「漁業場区」と中海「赤貝活かし場区願い」、四 明治旧漁業法と中海赤貝「区画漁業」免許、おわりに、である。

## 『近江水産図譜』を読む—琵琶湖漁撈の構図

橋本道範

### 【要旨】

本論は、明治期に作成された滋賀県水産試験場所蔵『近江水産図譜』に描かれた魚類と漁具・漁法について分析を試みたものである。琵琶湖漁撈史研究は近年飛躍的に研究水準が高まり、漁場の環境、魚種の生態と漁獲技術との連関、そして消費との連関が問われる水準に到達した。そこで、そうした視点での分析のため『図譜』を読むと、まず、湖魚之部では二七種類の魚類が、漁具之部では一七種類の魚類が取り上げられており、和名との対応関係を検討すると漁獲対象魚種は二八種となった。一方、漁具・漁法は、全部で三五種類が書き上げられている。これらは受動的漁具と能動的漁具とに分類されてきたが、「回遊」という生態学的な「自然そのものの「論理」」に沿ってそれを利用した漁撈と、その論理を超えて強く働きかけた漁撈との二つに区分したいというのが論者の主張である。今後、地球科学的自然と生態学的自然、そして人間の消費と生業、この三者関係の展開をいかに捉えるかについて模索してみたい。

# 近世末期「旧薩藩沿海漁場図」の 構図と記載事項

橋村 修

## 【要旨】

本稿では、近世期の漁場図の分類をおこなったうえで、「旧薩藩沿海漁場図」の構図と記載事項の特徴を抽出した。構図については、陸から海を、海から陸をみる二つの視点があり、本漁場図群では海から陸をみる天地が陸という絵図がほとんどであること、沖合漁の展開する浦の漁場図では沖合の島々などが描かれ、陸から海を眺める視点での描写の多いことを見出した。このことは、漁民の空間認識が広範囲に及び、その範囲と浦が専有する漁場の領域との間に差があることを示している。次に漁場図に描かれた漁法すべてを抽出したところ、敷網と地引網が多く、魚名を冠した網は外海に面した大型魚の漁業が盛んな地域でみられた。なお郷により情報量に違いがあり、正確に当時の漁法を抽出した絵図なのか疑問が残った。また水深表記について、現在の海底地形図と比較すると、その数値にはあまり違いがみられなかった。さらに、桜島郷と牛根郷漁場図は、薩摩藩郷絵図をベースマップにしている可能性を見通した。最後に、具体例として高山郷、串良郷の漁場図を取り上げ、臨海村、漁業の地域性を述べた。

## 韓国の漁撈民俗と漁場図—高興半島と濟州島の比較

李 恵燕

### 【要旨】

韓国で大量生産式の養殖法が普及するのは一九七〇年代である。この時期に韓国において主な養殖対象は、海苔、牡蠣、ワカメであった。高興半島は全羅南道のなかで牡蠣の名産地であり、本格的な養殖時代に入る前の牡蠣の生産量は全羅南道が一位であった。一九世紀の古文献に濟州島で生産されるワカメを国の半分の人が食べていたと記されているように、濟州島はワカメの名産地である。

漁村の漁場において大量生産の養殖が行なわれる以前とその後の漁撈民俗は異なる。韓国では二〇世紀以前の養殖方法について書かれた記録がないので、この時期の養殖がどのように行なわれていたか詳らかではないが、二〇世紀初期から大量生産の養殖法が開発される前まで沿岸の干潟では伝統式で牡蠣や海苔の養殖が行なわれていた。

本稿では高興半島と濟州島の漁場でどのように漁撈が行なわれていたかを考察し、これらの漁場に伝わる漁場図が誕生する背景を明らかにした。伝統時代に漁場図が描かれることがほとんどなかった韓国において、本稿で紹介する漁場図は極めて稀で貴重な事例である。

# 四つの漁場図からみた 地域社会についての分析—山形県飛島の事例から

新垣夢乃

## 【要旨】

日本の地域社会の漁撈活動の歴史を調べていると、漁場について記された「漁場図」などと総称される図像を目にすることがある。そして、調査の目的に資する漁場図は個々の研究において用いられてきた。

だが、そこで一つの疑問が浮かんでくる。それは、それぞれの地域社会を、その地域社会に存在するさまざまな漁場図全体からみたとき、そこからどのような地域社会の姿がみえるのかという疑問である。これまで地域社会に存在するさまざまな漁場図のなかから研究に資するものが選ばれ使用されてきた。だが、個々の漁場図の性格ではなく、その地域社会に残るさまざまな漁場図がそれぞれどのような性格と役割を有していたのかを明らかにしたとき、それを通して地域社会がもつどのような側面がみえてくるのだろうか。

本論では、そのような問題を山形県飛島の事例から分析を試みた。飛島には、四種類の漁場図が存在する。それらは、それぞれ地域社会における漁場利用の秩序、隣接地域との間の漁場をめぐる争いという対外関係、地域社会内の漁場をめぐる社会関係、漁を行う個々人が自然環境を記憶する媒体という特徴を有していた。そのことから、飛島に現存する四種類の漁場図からは、対自然環境、対地域社会内、対他地域という個人がもつ重層性と飛島地域の多様な側面をみることができる。

■一般論考

## 戦前農村経済更生から現代農村再生へ

### ―農村経済更生運動の歴史的教訓

森 武麿

**【要旨】**

戦前農村更生は上からの農村再生（国家主導型）、外からの農村再生（外発型）であった。この弱さが農民を戦争とファシズムの道に導いた。現代の農村再生は下からの農村再生（自治型）であり、内からの農村再生（内発型）であることが求められる。すなわち「上から」と「外から」の農村更生から、「下から」と「内から」の農村再生に転換しなければならない。とくに思想転換は、戦前の農本主義を克服し閉じた共同体から開かれた共同体へ、持続可能な地域社会、都市住民の田園回帰も含めた都市と農村の共生社会の建設が目標であろう。

## ■一般論考

# 民具と化した古文書—養生文書の調査実例

泉 雅博

### 【要旨】

旧家における古文書の伝来のあり方はさまざまである。通常は蔵や仏間、あるいは当主の部屋や隠居部屋などに保管され伝えられている場合が多いが、ほかにも襖や風・衝立・額などの張り替えの際に見つかった下張文書が持ち伝えられた場合などもある。いわゆる廃棄文書で、反故とされた古文書がたまたま他の用途に再利用されたことから伝来したケースであり、下張文書のほか漆紙文書・紙背文書などがある。

本稿では、能登国珠洲郡蛸島村（現、石川県珠洲市蛸島町）の島崎家から発見された「養生文書」という廃棄文書を紹介する。現在、引っ越しの際などに、箆筒などの物品を傷つけないために用いられるシート状のものを養生シートと称しているが、江戸時代にも同様の機能を果たすものがあつた。島崎家からは、反故とされた古文書によって作製された養生シート状のものが見出された。ここでは、養生シート状のものとして再利用された古文書を「養生文書」と名付けることにした。

従来、養生文書という廃棄文書は、本格的に紹介されたことがないのではないだろうか。古文書としては廃棄され、まさに養生シートという民具と化すことになった養生文書の語り出す世界に耳を傾けてみた。民具学の対象である「資料＝モノ」を、文献史学の領域から「史料＝文字テキスト」として読み解く試みでもある。

■一般論考

# 米国の台湾占領に関する研究と政策の変化及びその影響について

蘇 瑤崇

【要旨】

日本の真珠湾攻撃以後、米国の対東アジア政策は、戦後の東アジアの政治的秩序をどのように構築すべきかを中心に展開された。その中の一つが対台湾政策であった。

当初米国には、日本軍の連絡を切断するために台湾に侵攻する計画があったが、最終的に放棄された。終戦後すぐに台湾が中国に接收されたことは一般にはカイロ宣言の帰結として受け止められ、米国の計画はあまり注目されてこなかった。しかし、実はカイロ会議以後の戦略構想の中で沖縄と台湾に基地を確保するために台湾を占領する計画があった。この計画とその中止はその後の台湾問題と深い関連がある。本論では、戦争中の米軍の台湾研究と、それが戦後の台湾問題に与えた影響を明らかにし、既存の台湾歴史にみられる誤った解釈の一つを改めたい。